

キリスト・イエスの心を持ちなさい

皆さん、おはようございます。皆さんにお会いできて嬉しいです。今日は、私の不動のお気に入り聖句、ピリピ人への手紙2章の前半...実際には3節から13節までを紹介합니다。この聖句は3つの部分から成り、関連性はありますがそれぞれ異なっています。

その1. クリスチャンの他者に対する姿勢 (3-4節)

その2. キリストの姿勢 (あるいはキリストの心) (5-11節)

その3. クリスチャンの働き (12-13節)

今日の中心聖句はピリピ2:5-7です。

「2:5 あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。2:6 キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、2:7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、」

今日のメッセージのタイトルはこの聖句から取りました。「キリスト・イエスの心を持ちなさい」...キリスト・イエスのような姿勢を持ちなさい。キリストは神であり、三位一体の第二位格であったにもかかわらず、へりくだり、天での地位を捨て、人、そしてしもべとなられました。私たち人間を助けるために、人となり、しもべとなられたのです。それは創造主との関係を回復することによって、私たちの人生を正し、贖うためでした。私たちは、このキリスト・イエスの心、すなわち、神に従い、同胞に仕えるためにへりくだる姿勢を持たなければならないのです。これが今日のメッセージのメインテーマです。

前置きは以上です。この聖句のさまざまな部分を見ていきましょう。まずは3、4節です。

その1:クリスチャンの他者への姿勢

質問です。皆さんには「生涯の聖句」がありますか? 「生涯の聖句」、つまり人生の中心となっている特定の聖句はありますか? 多くのクリスチャンが、一つまたは複数の聖句を「生涯の聖句」として選びますが、私にとってはピリピ2章3-4節がそのような聖句の一つです。私にとっての特別な聖句はピリピ、ヤコブ、そしてテモテ第一にそれぞれ1つずつあります。なぜそれが私にとって特別なのか、それぞれ簡単にお話ししましょう。

テモテ第一1:5です。「1:5 この命令は、きよい心と正しい良心と偽りのない信仰とから出て来る愛を、目標としています。」

クリスチャンの命令(教え)の目標が三つしるされています：きよい心からの愛.....正しい良心.....そして偽りのない信仰です。私たちの教えの目標は、物事を覚えることでも、情報を覚えることでもありません。確かにキリスト教の教義を学ぶ必要はありますし、それをクリスチャン生活の土台とする必要もありますが、キリスト教の教えの目的は、その内容を頭の中に入れることではありません。その目標は、私達を内側から変えることです。心を変え、良心をきよめ、堅固で偽りのない信仰を持つことです。それが神を愛し、人を愛することにつながるのです。そしてこの節には書かれていませんが、これは聖霊の助けによって行われます。

この聖句は、単に聖書の知識を得るだけでなく、学んだことを実践し、ここに書かれている人格を私の内面、たましいの一部とするために私が人生の中心に置いているものです。

もう一つ私にとって非常に重要な聖句がヤコブ 1:27 です。

「1:27 父なる神の御前できよく汚れのない宗教は、孤児や、やもめたちが困っているときに世話をし、この世から自分をきよく守ることです。」

これはまことの宗教、私たちの父である神に受け入れられる宗教のすばらしい定義だと私は思います。これには2つの側面があります。一つは、私たちを取り巻く腐敗した世界に染まらず、きよい人生を送ること。もう一つは、社会的に最も弱い立場にある人たちを思いやることです。きよい生活を送る.....社会的に最も弱い立場にある人たちを思いやる。ヤコブ2章には、恵まれない境遇にある人への配慮という考え方が展開されています。また、マタイ 25:31-46 には、最後の審判で神の御国を受け継ぐのは、社会の貧しい人々の世話をした人たちである、と書かれています。救われるために働くことについて書かれているのではなく、真に生まれ変わったクリスチャンは、何らかの形で人を助けたいと自然に思うようになるということです。何らかの形で他者を思いやること。そして、この罪深い世界に汚されることなく、きよい人生を送ることです。

ヤコブ 1:27 は私が「生涯の聖句」と呼んでいる数少ない聖句の一つで、人生の中心に置いている聖句です。もう一つは、今日のピリピ2章にあります。3、4節を見てみましょう。

「2:3 何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。2:4 自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。」

「へりくだって」、これが基本です。神の御言葉である聖書を取り込み、心に潜め、それによって自分の心が変わることによって形成されるクリスチャンの心です。

ローマ 12:2 「この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」

へりくだった心とは、神の御心に従い、ピリピ 2:3 に戻って、自分よりも他者をすぐれたものと思うことです。自分よりも他者が大切だと考えましょう。これは、必要のある人を助ける準備ができていることを意味し、できる限りの方法で彼らを助けるのです。それは、心配事に耳を傾けること、質問に答えること、問題に対処するためのアドバイスをすること、一緒に祈ることを意味するかもしれませんし、物質的な必要を満たす手助けをすることもできません。自分の時間の100%を他者のために使うことはできませんが、必要が生じたときに他の人を助けられる姿勢を持つべきです。4節をもう一度。「自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。」他者に対して心を閉ざしてはいけません。彼らを大切に思うのです。それは、彼らもまた、神の目には尊い存在だからです。

3節の冒頭を見ると、私たちの動機について書かれています。自分勝手な動機では何もするべきではありません。自分が役に立っているのを見られると評判が上がるから人助けしたいと思っていますか。そんなことはしてはだめですよ。イエスはマタイ 6:1 でこう言われました。

「6:1 人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。そうでないと、天におられるあなたがたの父から、報いが受けられません。」

これがクリスチャンの心であり、へりくだった心、自分よりも他者を優先する心です。そして、その究極のお手本が、イエス・キリストなのです。

その2:キリストの姿勢 (キリストの心)

5節には、私たちクリスチャンは、キリストの心を持つべきだとあります。そして次からの節では、天の一番高いところから、この地で人となるために来られ...そして、最大の屈辱を受け、というキリストの途方も無い謙遜さの模範を見ることができるのです。

ピリピ 2:5-8「あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。6キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、7ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、8自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。」

ここの5節から11節までの部分は、「キリスト賛歌」と呼ばれています。私はこの一節が大好きです。ここにある描写が大好きです。キリストの地上でのへりくだった使命の描写です。そして、9節から11節までの天へのぼられる部分の描写です。

まず、地上へ来るといふへりくだった使命。私がこの箇所が大好きな理由の一つは、イエスが神という地位に固執することを選ばず、代わりに自分を無にして天を離れ、人間の肉を身にまとったという描写だからです。イエス・キリストは三位一体の第二位格であり、神位の第二位格であることを忘れないでください。三位一体はキリスト教の信仰の基本的な教義です。神は父、子、聖霊として存在し、三つの異なる位格がともに等しく、ともに永遠であるのです。多くの人が、イエスが神であると同時に人間であるとはどういうことなのか、この概念の理解に苦しみますが、この節にはそれを理解するのに役立つ描写が示されています。6節と7節をもう一度見てください。

「キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ」

イエスは神の御姿である方（神であり、神と同じ性質を持っておられた）のに、その神の特権を手放すことを選ばれました。イエスにはこの地上で成し遂げるべき使命があり、その使命のために(7節)-ご自分を無にされました。ご自分を無にした、です。私は、御子が天での地位と神の特権を捨て、地上に来て人間性を受け入れ、人間として生まれ、最も低い身分とも言えるしもべの形を取ったというイメージが好きです。それは、主は仕えるという使命を帯びてここに来られたからです。イエスは、人類の贖いの計画を達成するための父なる神の器だったので。そして、イエスは私たちに仕えるために来られました。

マタイ 20:28「人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。」

イエスは仕えるために来られたのです。そして、私たちの贖いを成し遂げるために、創造主との関係を回復するために、私たちの罪の罰を支払うために来られました。そしてそのためには、最も屈辱的な過程が求められました。8節「2:8 自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字

架の死にまでも従われました。」イエスはご自分の使命に従順でした。そして、その従順は死を意味しました。無実の方が、あなたと私の代わりに死んだのです。

ペテロ第一 3:18

「3:18 キリストも一度罪のために死なれました。正しい方が悪い人々の身代わりとなったのです。それは、肉においては死に渡され、霊においては生かされて、私たちを神のみもとに導くためでした。」

イエスは私たちのために死なれたのです。そして、最も屈辱的な方法である十字架の上で処刑されました。イエスは私とあなたのためにそうしてくださったのです。

ヨハネ第一 4:9-10 「4:9 神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。4:10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」

これが愛です-私たちの罪の贖いの犠牲となるために神が御子をこの世に遣わされたのです。御子である神が、ご自分を無にし、神の座を離れてこの地に来られ、人として生まれ、そして人類の罪を償うための犠牲として死なれました。ここに、私たちのためにへりくだったキリスト・イエスの心があります。これが、私たちが持つべき心です。自分のこと、自分の持っている特権、自分の快適な生活のことを思っ**て**はいけません。自分のことより他人のことを優先し、どんな手段でも、できうる方法でその人を助けましょう。

キリストの例にならいきましょう。

ヨハネ第一 3:16-18 「キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。17 世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見ても、あわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょう。18 子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行いと真実をもって愛そうではありませんか。」

では、キリストは苦しんで死んで葬られた後、どうなったのでしょうか。ご存知の通りです。3 日後に墓から勝者としてよみがえられたのです。イエスは死に打ち勝ちました。そして、それゆえに私たちも死に打ち勝ち、最後にはイエスとともによみがえることができます。使徒 1:9 にあるように、キリストは復活の 40 日後に天に昇られました。そして、コロサイ 3:1 にはこうあります。

「あなたがたは、キリストとともによみがえったのですから、キリストが神の右の座におられる上のことに心を留めなさい」。任務を果たしたキリストは今、天に戻り、父なる神の右の座という特別な場所に座しておられるのです。

ピリピの話 continué しましょう。9-11 節を見てください。

「2:9 それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。2:10 それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、2:11 すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」

神はイエスを高く上げ、“すべての名にまさる名をお与えになった”。これはどのような名を指しているのでしょうか。注解者たちにとっても不確かなようですが、私の ESV スタディバイブルのメモには興味深いことが書かれています。次の通りです。

「この名はここでは特定されていないが、神の呼称であるヤハウエ（ヘブライ語：YHWH）を指すと考える人が多く、七十人訳聖書ではギリシャ語のキュリオス、『主』と通常通りに訳されていてピリピ 2:11 でも記されている名である。いずれにせよパウロは、永遠の神の子が、神であり人として受肉される前にはなかった地位と権限を得たことを意味している。イエスがこの名を与えられたのは、ヤハウエの名によってメシアの権威を行使することのしるしである。...キリストは今、ヤハウエ(主)という神の名を帯びているが、彼はまだイエスという人の名で礼拝されている。イエスが最もはっきりと神の栄光を世に示したのは肉にあったときだったからである。このイエスの神性と人間性の驚くべき結合は、イザヤ書にある暗示によって強固たるものとされる。45:23 の「すべてのひざはわたしに向かってかがみ、すべての舌は誓い」という部分は、イザヤ書ではもっぱらヤハウエを指している（イザヤ書 45:24 を参照）。こういった表現が神のメシアとしてのイエス・キリストが主であることに適用されるということは、イエスが完全に神であることを示している。しかし、イエスを主として礼拝することが、この賛歌のすべてではない。イエスを高く掲げることは、父なる神にも栄光をもたらすものとなるのである。」(ESV スタディバイブルより)

「すべてのひざがかがみ、すべての舌がイエス・キリストが主であることを告白する」とはどういう意味でしょうか。最終的には誰もが救われるということでしょうか？いいえ、そうではありません。地上での人生でキリストを拒否した失われた罪人は、新約聖書の多くの箇所ですべられているように永遠の罰に送られますが、そうなる前に、そのような人はもみな、やはり膝をついて、イエス・キリストが主であることを告白するのです。反逆した人間、反逆した御使い（悪魔）を含むすべての者が、イエス・キリストが主であることをひざまずいて認めることになるのです。それはすべて神の栄光のためです。

その 3:クリスチャンの働き

今日の箇所の最後の 2 節まで来ました。

ピリピ 2:12-13- 「そういうわけですから、愛する人たち、いつも従順であったように、私がいるときだけでなく、私のいない今はなおさら、恐れおののいて自分の救いの達成に努めなさい。13 神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです。」

私はこの節が好きなのですが、12 節は人によっては不快に感じたり、混乱したりするようです。「救いの達成に努めなさい」-私たちは救いを勝ち取るために働くのでしょうか？いいえ、それはこの節が教えていることではありません。私の ESV スタディ・バイブルによると、「パウロは、救いのすべての側面と祝福を徐々に経験するようになるという意味で『救い』と言っている。ピリピの人々が継続に従順であったことは、この意味での救いを「達成するために努める」ことの本質的な部分である。」

ギリシャ語の動詞 "Work out(達成するよう努める)"は、「何かを成就・完成させるために継続的に働く」という意味です。なるほど。自分の救いを成就させる、完成させるということです。天に行くまで何もしないで座っているのではなく、やるべきことがあるのです。神に従い、人生における罪を根絶し、キリストのからだである教会の活発なメンバーであるために努力が必要なのです。せつかく生まれ変わったのですから、きよい生活を送り、すべての活動において神を敬い、神の御国を建てあげることに貢献することで、生まれ変わったクリスチャンとしての自分の立場を成就させてください。

自分の救いを完成させるために働きましょう。しかし、自分の力だけで行うではありません。13節「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです。」神は、ご自分の望むことを志し、ご自分の望むことのために働くように、あなたのうちに働かれます。

神は罪に直面した時に助けてくださいます。私はコリント第一 10:13 が大好きです。

「10:13 あなたがたの会った試練はみな人の知らないものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを、耐えられないほどの試練に合わせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます。」

神は私たちとともにおられます。そして、脱出の道を備えておられるのです。私は、この聖句にととも励まされました。私は誘惑に決して屈することはない、それは、私が罪に陥る前に、誘惑に耐え、誘惑から離れることができるように、私の神が必ず逃れる道を備えてくださると知っているからです。イエスは弟子たちに聖霊を送られると言われました。

使徒 1:4-5 「1:4 彼らといっしょにいるとき、イエスは彼らにこう命じられた。「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。1:5 ヨハネは水でバプテスマを授けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。」

1:8 「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」聖霊は私たちの働きのために力を与えてくださいます。聖霊がともにいてくださるからこそ、私たちはその働きをすることができるのです。

ここで警告です。テサロニケ第一 5:19 「御霊を消してはなりません。」

私たちの生活の中で聖霊の働きを消してしまうことは可能であり、そうすると主のための働きに大きな支障が生じます。一方、ガラテヤ 5:16 に従いましょう。

「5:16 私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。」

常に御霊の導きに敏感でありながら御霊によって歩むのです。使徒パウロの証で終わらしましょう。

コリント第一 15:10 「15:10 ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。」

パウロは主のために懸命に働きました。それでも彼は、自分一人で労苦していたのではないと証言しています。彼が主のために働いたとき、神の恵みが彼とともにあったのです。私たちは、どんな賜物であれ、どんな仕事であれ、主から与えられた務めの仕事をするとき、いつも神に寄り添い、神の力、聖霊の力に頼ることを忘れないようにしましょう。